

伊藤整全集

第九卷

伊藤整全集 第九卷

昭和三十一年九月一日 第二次初版印刷
昭和三十一年九月五日 第二次初版發行

定價 貳百七拾圓
地方定價 貳百七拾五圓

著 者 伊 藤 整

東京都千代田區神田小川町三丁目八番地

發行者 河 出 孝 雄

東京都文京區柳町二六番地

印刷者 山 元 正 宜

發行所 東京都千代田區株式會社 河 出 書 房

神田小川町三ノ八
電話東京(29)三七二番

目 次

火の鳥	五
-----	---

一 むしばめる花	七
----------	---

二 造花	二四
------	----

三 誘惑	三五
------	----

四 變幻	四七
------	----

五 火の鳥	五八
-------	----

六 渦卷	六七
------	----

七 薔薇座	一九
-------	----

八 猿と人	三三
-------	----

あとがき	一五五
------	-----

花 ひらく 一五七

水野直人の上京 一五八

木村玄氏と京子夫人 一七三

大學生たち 一八二

木村玄氏の行方 一九七

木村玄氏の逃亡生活 二〇一

堀朝子の酒場 二一八

京子夫人の意見 二二八

絲迂生教授の講義 二三三

木村ハルミと水野直人 二五九

下田齒科醫と下田夫人 二五〇

若返れる木村玄氏 二五六

解 説……………瀬 沼 茂 樹……………三三

在京同窓會……………	二六一
木村玄氏の實在……………	二六七
愛と眞實……………	二七五
あほう鳥……………	二八一
眞實と愛……………	二九〇
あとがき……………	二九三
ヒサ子の生い立ち……………	二九九

一 童女の像……………	三〇〇
二 少女の像……………	三一二
三 妻の像……………	三四六

裝
幀

岡
本
芳
雄

火

の

鳥

フェニックス(火の鳥) 伝説上の鳥

Phoenix—— a fabulous bird, of
金と赤の羽をもったヘロドトスの伝える
golden and red plumage, which, accord-
ing to a tale reported by Herodotus,
500年ごとにヘリオポリスにやってくる
came to Heliopolis every 500 years,
その父鳥が死んだとき
on the death of his father, and there
その体は太陽の神殿の中で火と燃えた
buried his body in the temple of the
もう一つの説によると
sun. According to another version,
フェニックスは500年生きたのちに
the phoenix, after living 500 years,
その身を火葬用の火のついたまきで燃やして
built himself a funeral burning pile
その上で死んだ するとその遺骸(いがい)から
and died upon it. From his remains
新しいフェニックス(火の鳥)が生まれた。
a fresh phoenix arose.

(The Oxford Companion to

English Literature.)

一　むしばめる花

一

子供の泣き聲が耳に入つて目が覺めた。眠りが足りない
と思うと、私はすべてのことが厭わしい。もう眠れそうも
ないので、起きて鏡の前に坐つてみた。顔の皮膚は荒れて
いて、クリイムで拭つても汚れが残つてゐる。朝のうち風
呂へ入るといいのだが、今の姉との生活では、私には言い
出せない。昨夜姉は風呂を沸かしてくれたのだが、私が歸
つたときは大分冷えていた。姉は起きて寢巻のまま石炭を
くべ出したが、タア子が泣き出した。「いいのよ、お姉さん、
私がする。タア子が泣いてる」と私は言つた。私は子供
の泣き聲が我慢できない。私の中に、いつまでも癒着^{くわく}しな
い傷があつて、そこに響くのだ。泣き聲、子供の、赤ん坊
の、人間の、猿の、あの泣き聲が私には我慢ならない。あ
れが私にはたまらない。「そう、じゃ沸かして入つて下さい
ね。いやらなつちまうのよ。私がいなくてすぐ目を覺ます
んだから。」姉はそう言つてガチャンと焚き口の蓋をしめ、
冷たい廊下を出て行つた。その細帯をした後姿を、私は、

汚らしい生き物を見るように見送つた。女は四十すぎて
も子供を産み、その子供のために、男への憎しみ怨みを忘
れることができる。私は、女をそういうものとして證明し
て見せる姉をゆるすことができない。私は自分がきつい目
をしているのが分つた。私なら、と思つた。

そして、私は姉の父とちがう私の父を、どうかすると自
分ですら「外國人」と思いがちな父の姿をちらと浮ばせた。
昨夜、私はそのまま風呂を焚くのをやめて、自分の室へ戻
つた。酒の酔いはさめ切つていず、私はあの、どうでもな
るようになれという意識のなかで、それでも型を崩すまい
として服を脱ぎ、蒲團^{ふとん}の中に滑り込んだ。寢巻は枕の横に
疊まれたままだつた。

何という顔だろう。眼の前にある擴大された自分の顔、
それは世間で言う、あの三十女の顔なのだ。あるときは、
とても汚ならしく、あるときは、女の命のさかりのように見
える。私は西洋の女のように早く衰えが来るのかも知れな
い。私の肌はほとんど白壁のように白い。日本の女にも白
い肌はある。それは、東洋人に共通の赤い濁りから抜け出
した間違いのような白さで、たいいて美しい血の色を皮下
に持つてゐる。私のはそうでない。私のは、何かの色、白
く塗られたような、白いのが汚れてあるような白さだ。髪
は黒に近いが、大分赤味を帯びてゐる。私の肌は、少女時

代、それから二十五歳頃までは、自分でもうつとりするうちに美しかった。私は何時間も鏡の前に坐つて、見ていたものだつた。上級生や友達が私を見る目つきで、私は自分を眺めた。まぶしいような、うつとりするような、神聖なものを見るような目つき。この私は美しいのだ。ああいう目つきをあの人たちにさせずにおかないくらい美しいのだ。私は自分の美しさに、その頃は、酔つていた。暗い所では黒く見え、明るい所ではやや藍色に見え、どうかすると綠色に近くなる眼の色、目と目の間が少し離れているのが少女らしいあどけなさを作っていることも私は知つていた。その自分の顔を、私はあの黄色い、赤い、でなければ血の色の透いて見える白い皮膚と眞黒い髪と眼を持つた日本の少女たちが、西洋の物語りの美しい妖精フェアリーにあこがれる目つきで見つめるのを感じていた。だけど、彼女たちは怖いもののように私の身近に來なかつた。私は美しかった。しかし私は誰のSにもならなかつた。西洋人のメイドの生んだ子、いいえ、それではない。私の異質の美しさ自體があの人たちを近づけないのであつた。私と愛の告白をし合つたり、身體の接觸をし合うのはあの人たちにとつて、怖いことだつた。

そして、それが私をやるせなくし、私の毎日を、演技的にした。私はそのときから藝をしていた。七つまで英語で

暮していた私は、父が歸國して母と二人、いいえ、間もなく姉と三人で日本語で暮し、日本の學校や友達の世界に入つたけれども、女學校に入ると英語は急速にうまくなつた。初め、それを私は自分の赤い髪と同じように恥じ、隠そうとした。しかしその卒業頃、私は自分の美しさが人の目を引くようになると同時に、自分の生まれに對して自信を持つた。女子大學に入り、私は積極的に自分を作つて行つた。日本が中國で戰爭を始める少し前、あの女子大學には祕密な社會科學研究會もあり、定期的に外語劇大會が催されてゐた。私の容貌と語學とは、そういう雰圍氣の中で目立つた。私はロメオを、チルチルを演じた。いつも男役が私にまわつた。背が高いとか、動作がはつきりしているとか言う口實で、私は主役を押しつけられた。そして學園生活でも、私はそういう役を持つてゐた。日本の家庭で、未來の同じような家庭の主婦になる鑄型型にはめ込まれながら育つて來た少女たちは、自分の意見、自分の一人立ちの心を持つていないのだ。何かにもたれ、絡まり、陰口を言う。私はそんな風に育たなかつた。父が歸國してから呼び寄せた姉に向つては、母は「フミ子、そんな歩き方は」とか「フミ子、足袋のコハゼはどうしたんです」と言うように、自分の附屬物としてやかましく言つたが、私に向つては、階級の違ふ人の預り子のように接した。父の記憶が、父の

動作が、いつも、私の中に現れるという豫期と怖れで母は私を見ていたにちがいない。父の記憶が、私を日本人に馴（な）れることから母を妨げたのだつた。私は母にかしずかれて育つた。姉も次第にその母の調子を見習つた。父からの毎月の送金はきちんと正金銀行に拂い込まれていた。つまりそれは私の金だつたのだ。戦争が近づき、爲替相場が變ると、二十ポンドの金は日本の圓で次第に多くなつた。私は空白な成長の中で、母や十ちがいの姉や級友たちが作る窪み、遠慮、期待などの中へ自分を伸ばして行くより外なかつた。英語の教師たちですら、私の發音の自然さに一目おいて、私を腫れもの扱いにした。私はその頃から、時々ヒステリックになつた。私が手を伸ばすと、すつと相手が引つ込む。その空白な周囲の苛立たしさ。それは恐怖のように私を驅り立てた。私は自分の鑄型を、父を求めた。父に手紙を書くことは禁じられていた。私には一人の妹、二人の弟が、イギリスに居るということだつた。私はある時ラムを讀んで泣いた。それは、ちゃんとした家庭で、落ちぶれた好ましくない縁者が持てあまされる話だつた。私は母にも言わない悲しみを持つようになつた。私は姉に物をぶつつけ、何日も母に口を利かなかつた。母はおろおろし、足音を忍ばせて家の中を歩いた。

私は學園であの祕密研究會に出た。黒い色の汚いカラー

をつけた青年が階級構成の理論を説明し、五六人の學友が身體を固くして聞いていた。私はその歸りにもらつたパンフレットを何冊か讀んだ。そしてそれつきり出なかつた。「どうしたのよ、エミちゃん、もう出席しないの？」と、男のようないかつい顔と身體をした同級生の村井さんが、教室の窓の下、乾いた下水の兩側に脚を開いて、私に言つた。村井さんですら、私に向つては顔を近寄せない。私になにか觸つてならない神聖な、また穢れたもののよう。私は「うふつ」と含み笑いして、靴底でザクザクする下水溝の角をこすつていた。It can't mend my sole. と私はその時習つていた「ジュリアス・シイザ」の靴屋を引用したいところだつた。地下運動の資金募集の話があつたとき、私は村井さんに金をあげた。「これ、あなたにあげるのよ」と私は言つた。とにかく私に祕密をうちあけるところまで近づいてくれた村井さんに、私はあなたが好きだけど、と、もう少しで言うところだつた。私を學友と親しく結びつけたかも知れないたつた一つの機會はそれで失われた。

その頃私に、いいえ、私の不幸に氣づいたのは會話の教授にいらしていた尼さんのアーメンガアド先生だつた。私に話しかけると、アーメンガアド先生の皺に蔽（おほ）われた眞蒼（まそう）な大きな眼は、心持ち外の生徒へよりも長く注がれてい

た。私は私で、授業が終つて櫻の並木の下を、校門のあたりまで神經痛の脚を心持ち引きずるようにして歩いてゆく先生の黒い尼僧服の後姿を、じつと見送つていた。

でも私は先生の姿が見えなくなると、すぐスカートをなびかすようにして階段を駆け下り、校庭の隅にある劇研究室に行くのだつた。私は花形だつた。その頃絶頂にあつた少女歌劇では、男役をする少女たちが花形だつたように、女の學校ではロメオになりチルチルになる私が花形だつたのだ。そして私はそのとおり振舞つた。自分の美しさにこだわらないこと、確信ありげに振舞うこと、私にとつては學校が舞臺だつた。見られて生きること、内側のむなしさを逃れて、見える自分を作り、皮膚や表情や動作で生活すること、火花のようなものを絶えず身のまわりに作つていくことが私の日常だつた。いつか私はアーメンガアド先生に話しかけるかも知れない。すると私は別な私になるかも知れない、と私は思つていた。でも私はそういう自分にならないように一生懸命やらなければならないのだと思つた。アーメンガアド先生とお話したりすれば、私は自分を失つて泣き出すだろう。私はみなし兒だ。私はどこにも生きる場所のない捨兒なのだ。よしんば泣いて、あの先生の胸にすがつたとしても、それが何だろう。アーメンガアド先生は私と同じじゃない。あの人だつて心は向うにある。大海

と大陸を隔てた、古い文明と古い都市と古い生活と、そして私がその一人ではない群集とに、あの人はずながつてゐる。

二

そして今、それから十年あまり時がたつて、私は、雀の囀さえずりつてゐる窓の前で化粧を落した自分の顔を見ている。怖いもののように、内證で、私は自分に向ひ合う。なんという汚れだろう。きめに染み込んだ塵のようなものは、もう取れないのだ。あの黄色い、なめらかな皮膚には浸み込まないものを、私の皮膚は吸い取り、そして定着させてしまふ。あの聖賢に漂うような、金色に反映する美しい少女時代の私の皮膚は失われた。そして顔の形が、頬、顎、輪郭、目鼻立ちが、私をぞつとさせる荒地のように擴大されて鏡に寫つてゐる。モンゴリア型。目と目の間が離れ、頬骨が廣く出ばつてゐる東洋の顔が、私をおびやかす。ほら、ねえ、と言ふように。母が亡くなつてから、世帯の苦勞をした揚句私の所へもどつた姉を、私は母とそっくりだと思つた。だが、私もそりなのだ。皮膚の輝きの失われた私の顔の型は、それはあの母の顔だつた。そして次第に私はこの土地に結びつき、この東京に、日本の人間に混り込んで行くのが分る。だが私は氣を取り直す。顔は役者の私にとつ

ては、カンヴァスのようなものだ。なあに、という氣持で、私はその恐怖をすつと跨いで越す。今私の前にある顔は、これはどうにでも使える。その上を一度塗れば、それは昔の少女の私以上の、どんな種類の美しさでも作り出せる。そして私は美しい、と自分に言いかけせる。自分がそう思い込んだ瞬間から、私の顔は美しく輝き出すような氣がする。何という考に私は慣れて來たのだろう。

扉を叩く音がして姉の顔がのぞいた。「ちよつと」と言つて、音を立てずにカーベットをふんで来る。いつでも小聲、猫のように、腰をかがめて歩く。もうタア子の晝寢の時間らしい。姉は小さな封筒の手紙を差し出して、「昨日いらしたんだけど、留守だと申し上げたら、手紙を書いて……」

私は聞きながら文字を見てはつとした。杉山の手だ。

「それで……」と私は姉を見る。

「何ともおつしやらないで……昨夜忘れていたものだから。」

「ええ、いいわ、ありがと。」

私が聞きたいのは杉山がどんな様子をしていたか、どんな表情だったかということだけでも、姉はそこまで私の方に立ち入らない。出て行く姉の後から、「食事もうすぐするわ」と言つて私は封を切る。事務所に

も二度男の聲で電話があつたと言う。手帳を引き裂いた紙に「一度お目にかかりたいのです。面倒な話ではありません。吉良氏からも話して頂いたと思います。また参ります」と書いてある。こちこちと固まつた見ていて苦しくなる文字だ。この文字の性格がすべてのああいふ事の原因だつた。何かぞつとするような、自分の内側にある厭わしい記憶が群らがつて来る。網の一端を鈎にかけてしまふと全體がやがて水の中から上つて來る時のように、つながつて群らがつて押しよせる。強い力で胸をしめつけられるような緊張が始まる。小劇場の文藝部室の亂雑な埃をかぶつた棚や背の破れたソファや、母がやつて來て支關にたたずんでいた彼の下宿や、今と同じ字で書いた彼の賣れない脚本の封筒にベタベタと貼つた切手など。それから、犬が爪先でしがみつくように、「別れない理由はどうでもいいんだ。おれは別れないんだ」と言つて、瘦せた身體で疊に胡座をかいたまま、あらゆる筋肉を引きしめるようにしたあの人の顔が浮んで來る。

だが、それと重り合うようにあの田島先生が、學園の大きな硝子戸のはまつた談話室で、腰かけた私たちの前に進んで來たときの黒いズボンの姿が現れる。英文助教の岩井女史は子供のようにはかんで紹介した。それを待つている間、四十歳近くに見えた田島先生は岩井女史の戸まで

いも私たちの緊張も全體として靜かな作法の中に受けとつていた。あの歩きかた、片足ずつ意識して前へ出す慎重な落ちつきは、日本人の紳士のいかめしさと違ふものだった。私は遠くに、あの煙草の匂のようなもの、父が家の中を歩きまわつた姿を思い出した。それからよく訪ねて來たマカアラさんやマカカラ奥さんのカステラのような匂を。あの軟い、他人にも自分にも均等に氣を配る注意深さ。あれは翻譯ものの上演になると、私たちの仲間に缺けているものだった。土岐さんも笛子さんも、みんな自分だけに集中してこちこちの日本人になる。後になつて、それだと段々氣のついたもの、それは父と田島先生に私が嗅ぎつけた共通のものだった。「私は先頃ヨーロッパの見學旅行から歸りましたので、向うの實驗的な新しい演劇についてお話ししたいと思います……」ピネロウとダンセイニ、ピトエフ、ヴィユウ・コロンビエ、クレイグ、藝術座の話。純粹演劇と實驗劇場。あの時のお話は、その後の薔薇座での稽古の間に絶えず聞かされた演技論と私の心の中で混り合っている。しかしあの黒いズボンの片足ずつを靜かに伸ばすように前へ出た先生の最初の印象、あれが私を薔薇座に引き込んだ本當のキツカケだった。

そのあとで私たちは、一週間ほど前にすんだ外語劇のキヤピュレット家の廣間の場を立稽古の形でお目にかけた。

ずいぶん恥しかつた。セリフには自信があつたが、研究會長の岩井女史があがつてしまつていたので、それが皆に傳染した。田島先生は幕になると同時に「あなたは」と、私を指で差し、鋭い、はつとするようなきつい眼で私を見て仰しやつた。地で行つていてかなり上手だ。だがそれは、言わばあなた自身の顔や身體の力を出しているだけです。ロメオは口實であるにすぎませんね。もつとも専門家の批評をしているのでありませんから、これは言いすぎですが、と。外の人たちには何も言わなかつた。そのあとで奥家先生と岩井女史に讃辭を呈されたとのこと。そして、私のことを訊ねていたそうだ。そして私は卒業後、いやいや勤めていた女學校の英語教師に少し慣れた頃、突然田島先生のところへ呼び出されて、言わば夢中でアーニャをやらされ、その後でびつくりするような厳しい稽古と、俳優仲間の意地悪さと、嫉妬の渦の中へ投げ込まれた。私の生活はそうして始まつたのだつた。杉山とのことも……

食事していると、タア子ちゃんが硝子戸のかげからのぞく。兩手で硝子を押している。「オバチャン、オバチャン、ウマウマ」と言う。泣き聲でないタア子の舌足らずの言葉は、恥しいほど、私の氣持をやさしくしてしまふ。私は不機嫌から暴力で引つ張り出されてしまふ。暴力、子供の暴力は何をでも踏み越える。機嫌よくしているときのタア子

の顔をちらと見ると、何か泉のようなものが私の中から吹き出す。胸に灯がともつたような氣持になる。姉はタア子を遊ばせておいて、昨夜の風呂水で洗濯をしている氣配だ。「いらつちやい、いらつちやい」と私は箸を持つて手を上げて招く。そして立つて行つて硝子戸を開け、膝の上のせ、箸でつまんで一緒に食べさせる。子供の可愛らしさと、子供の世界が私に思い出させる不安は、紙一重だ。その内部の、電球の内側のような小さな今の世界で、私はタア子と二人になる。その灯に私は心を暖め、頬ずりをするうちに、日向くさい黒いオカッパの髪の匂をかく。そこへ姉が入つて来て、「あら、いいわねえ、タア子ちゃん」と手を肘まで赤くして何かを取りに室の方へ行く。すると、すつと私の小さな優しい心はかげる。私は不機嫌になる。タア子を膝にのせていたのを見つけられたことの恥しさが、腹立たしさに變る。その恥しさは、火花のように類を呼ぶ。

姉は杉山を知っている。あれがあの杉山だと分つていて黙っている。そして杉山の方がまた、姉に私とのことを何か話したかもしれないのだ。私はこんな無邪氣な顔をしていられない筈なのだ。今朝はこんな風にしているいい目ではなかつた。私は自分をゆるせなくなる。そうだ、こんな風にしているいつも私の不安は始まるのだつた。自分が假りに、

他人の眼にうつつただけの姿で破綻^{はた}していなかつたから、その姿のまま遊んでも笑つてもいいと思ひ込む。それは私は自分にゆるせない。姉がその場を赤い腕をむき出しにして用事ありげに通つたこと、そしてタア子に向けておけば私は機嫌がいいと自得した氣配。そんな風に見られている自分が私は嫌いだ。それだけで私は、自分に對しても姉に對しても、腹が立つて来る。私の世界は危くなる。私はやつと茶漬けにして食事を終え、タア子を、火藥が導火線を逃げるように、「はら、あすこ、ハトポッポ、チッチッチ」と言つて室の外に出し、障子をビシャンと閉める。

室へ入つて扉を閉めるとともにタア子の泣き聲がする。私を追つている。こういう時、私は髪をかきむしりたい程その聲におびえる。あつ、いけない、と思ひ間に、水を流す音や「いい子、タア子、すぐね、すぐね」と姉が聲をかけているその氣配と關係なく、その泣き聲は、私に、子供を産むのをやめるためにあの病院で寝ていた一週間の苦しさを思い出させる。それは更に、さつきの杉山の手紙と引火し合う。私はその恐怖から逃げ出すように大急ぎで化粧する。目がしらに心持ち鬚^{ひげ}をつけること。頬はただ日本人らしい肌色に、むしろ目立たなくし、顎や首筋に白さを残すこと。ほとんど一刷毛でできる。私は持ちものを、机の引き出しや、昨夜のハンドバッグなどから、かきまわすよ

うにして揃え、火のついた家からのがれるように、姉の磨いておいてくれた靴をはいて逃げるように飛び出す。足早に歩き、角を曲つたところから、ゆつくりと自分に歸る。そしてやつと、私は一人いる安らかな心になれる。

垣根に沿つて、小さな家々の門や踏み石や藩戸などがある日本の生活の心づかいは私を苦しくする。どこも同じだ。戦時、私と母とは父からの送金が絶え、三年目四年目はひどく苦しい生活だつた。そして杉山があんな芝居を企劃したのだつた。慰問興行という名目で、軍國主義の安芝居をうちながら、日本の各地、中國、臺灣と歩きまわつた。ひどい出しものだつた。チェーホフもオニールもいけなかつた。私は肌を露そうとして強いオークルを使い、髪を染めた。作りのものの日本人になつた自分の中に、私はいつも息をひそめ、あたりをうかがつて生きていた。内地の農村の小驛の話。あれだけがよかつた。落語家、漫才といつとも一緒だつた。東京へ戻つたとき四ヵ月だと思つていたのに六ヵ月だつた。それでも杉山は強い。お腹の中で動いていたのに。私はあのとときの自分の顔が分る。絶えずあの命に向つてゐる顔だつた。でも私は同意した。そしてあの郊外の小さな病院で。そのあと、私は自分が生きていることの意味をなくしたような氣がした。生活のため、と私は考へたくなかつた。もつと生活が樂な時でも、私は子供はい

らない筈だ。あの頃は、あの「藝術」という名をつけていた正體の逃げやすいものは、私の中で、戦争とイデオロギイと自分にかぶせた日本人の假面のなかで、息も絶え絶えだつた。犠牲がなければ存在も確かめられないよりなかななものだつた。私の嚙のために、魚にとつての水のようだつたロシアやフランスやイギリスの翻譯劇は驅逐された。その中にひそんでいたあの人間らしいもの、私にとつては本當のヨーロッパよりももつと痛切な生きる場所だつた、あの日本でもヨーロッパでもない翻譯劇への執着は、あの犠牲によつて、私の中に生き残つたようなものだ。

恢復が思わしくないので一週間いたあの病院で、向いの室、隣の室で赤ん坊が生まれた。あの時から、私には赤ん坊の泣き聲がたまらなくなつた。あれは猿だ。どこか遠い原始林の奥で枝にぶらさがつて、泣く。それは何か大きな動物に取つて食われる。一匹が不吉に叫ぶ。猿の群は波のように枝をざわめかして逃げる。小さいのが逃げ遅れる。それは助からない。それは血を流し、内臓を食われる。まだそれでも泣いている。泣いている。毎晩私は同じ夢を見た。そしてどこかの室の赤子の泣き聲に目が覺めた。恢復が十分でない、と醫者のとめるのをきかずに、私は退院した。退院した日、私は、發作を起した。あんな脚本を書いて、そして私の赤ん坊を殺して、と私は杉山にしがみつ